

先住民 怒りの話

これから先住民の怒りの話をします。先住民とは「もともと大昔からその土地に住んでいた人々。よそから後で入ってきた人々でなく、その土地に先に住んでいたもの人々」という意味です。

ここでは、「ネイティブ・アメリカンの怒り」と「アイヌ人の怒り」の二つの話をします。

「ネイティブ・アメリカン」とは、コロンブスがアメリカ大陸を発見する前から、そこにもともと住んでいた人々です。

「アイヌ人」とは、日本の北海道に大昔から住んでいた人々です。どんな怒りの話でしょうか。

その一 ネイティブ・アメリカンの怒り

コロンブスの大航海

コロンブスは一四九二年、アメリカ大陸を発見しました。

今から五百年ほど前になります。日本では、室町時代に当たります。それまでは、アメリカ大陸はヨーロッパ人によって発見されていませんでした。それでアメリカ大陸は世界地図にのっていませんでした。

その当時、地球はたいらであり、地球の果ては大きな滝となつて落ちていると思われていました。しかし、コロンブスは、昔の学者の本を読んで、地球は丸いと信じていました。それで、当時のヨーロッパの人々は東の方から海をわたつてインドへ行っていました。コロンブスはぎやくに西の方からでも海をわたつてインドへ行けるはずだと考えました。そして、コロンブスは大航海を始めました。

アメリカ大陸の発見

一四九二年八月三日、コロンブスは、百二十人の船乗りたちと、三せきの船にのつてスペインを出発し、大西洋を西へ西へと航海しました。これは、思いきつた大冒険でした。七十日の苦しい航海のすえ、とうとう一つの島を発見しました。「おーい、陸地だぞ。インドだ。やっつと、インドに着いたぞ。」と、みんなは手をとって喜びました。

そこは、インドではなく、ほんとうはアメリカ大陸の一部だったので。今のバハマ諸島の一部でした。コロンブスは、

その後、三回も、大西洋を西へ航海して、キューバ、ハイチ、ジャマイカ、中央アメリカ、メキシコ海岸などに到着しました。しかし、コロンブスは、死ぬまで、そこをインドだと信じていました。だから、コロンブスは、そこに住んでいる人々をインディアンと呼びました。インディアンとは、インド人という意味です。のちにインディアン（インド人）と呼ぶのはおかしいので、アメリカ・インディアンと呼ぶようになりました。今ではインド人とはまったくちがうので、アメリカ大陸にもともと住んでいた人たちという意味で、ネイティブ・アメリカンと呼ぶようになっていきます。

コロンブスが第一回目の航海でアメリカに到着した日が、一四九二年十月十二日でした。そこで、この日を記念して、今でも、アメリカ人は、十月十二日を、コロンブス・デーと呼び、盛大なお祝いのお祭りをしています。

ネイティブ・アメリカンの怒り

ところが、ネイティブ・アメリカンの人々は、コロンブス・デーを喜んでいません。なぜでしょうか。ネイティブ・アメリカンの人々は、こう言います。

コロンブスは、私たちに、インド人というまちがった名前をつけた。コロンブスがアメリカに到着してから多くのヨー

ロッパ人がわたってきたが、私たちに、ひどい伝染病をくれた。アステカ王国やインカ帝国の遺跡をこわし、そこにあった多くの金銀の宝物をうばった。ヨーロッパ人たちは、私たちの小屋に火をつけ、肥えた土地をうばい、私たちを奥地のやせた土地に追いやった。ひどいことに、私たちの祖先の、たくさんの人々を奴隷として売ったり買ったりした。今、私たちは観光客の見世物にされている。私たちがはずかしめられ、貧しい生活をしているのは、コロンブスがアメリカに到着し、ヨーロッパ人がわがもの顔で私たちを支配しているからだ。

そもそも、コロンブスはアメリカ大陸を発見したというが、私たちが言えば、私たちの土地にコロンブスが到着したにすぎないのだ。「アメリカ大陸を発見」ではなく、「アメリカ大陸に到着」なのだ。

こういうことで、どうして、コロンブス・デーを祝うことができようか。

今でも、アメリカのある地域では、お店に

「インディアンは、入るべからず」

と、はり紙をしているところがあり、ネイティブ・アメリカンの人々が買いたい物できない店があるということ。また、ある地域では、公衆トイレが、白人用とネイティブ・アメリカン用と別々にあり、ネイティブ・アメリカン用は白人用と

くらべて粗末なトイレになっているということです。

このように、ネイティブ・アメリカンは、ヨーロッパの人々にしいたげられ苦しめられてきました。長い間、ヨーロッパ人に迫害を受けてきました。みなさんは、アメリカの西部開拓時代の映画、白人とアメリカ・インディアンのあるその映画をみたことがあるでしょう。あのようなことが、ほんとうにあったのです。

今のアメリカは、こうした人種問題で、大きな苦しみや悩みをかかえています。少しずつよくなるはなっていますが、まだまだこの問題は根深いものがあります。はだの色が黒い、黄色い、白いで、人間を差別することはとてもよくないことです。人種がちがっても、世界の人々は、みんな、なかよく、協力し合って、平和な社会を作っていかなければなりません。ネイティブ・アメリカンにとたところがあるのが、日本のアイヌ人です。次に、この話をしていきましょう。

その二 アイヌ人の怒り

北海道と日本人

アイヌ人は、北海道に大昔から住んでいた民族です。一万

年前からとも、五千年前からとも言われています。北海道には、今も、アイヌ語の地名が四万五千もあります。アイヌ人は、アイヌ語を話し、狩をしたり、魚をとって生活したりしていました。農業はあまりしていませんでした。

十五世紀ごろになると、アイヌ人が住んでいる北海道に日本人（アイヌ人は本州に住む日本人を『シヤモ』（和人）と呼んだ。）が、本州から移り住むようになりました。

アメリカ・インディアンと白人とのあらしがかったように、やはり、北海道でも、日本人とアイヌ人とのあらしがありました。日本人が北海道にわたり、アイヌ人を征服（せいふく）した（が）わせること（し）しようとしたのです。北海道に住んでいるアイヌ人を自分たちの思うままに支配しようとしたのです。

一四五七年 コシヤマインの乱

一五一五年 ショヤコウシ兄弟の乱

一五二九年 タナサカシの乱

一五三六年 タリコナの乱

一六六九年 シヤクシャインの乱

シヤクシャインの乱では、日本人（松前藩）がアイヌ人に、なかよくしようと呼びかけて、酒もりの会を開きました。ところが、日本人（松前藩）は酒によったアイヌ人の指導者シヤクシャインをはじめ、多くのアイヌ人をだましようちにせず、きたないやりかたで殺してしまいました。こうして

戦いがおこり、アイヌ人は負けてしまいました。やがて日本人（江戸幕府）によるアイヌ人への支配がはじまりました。

日本人が移り住む

明治時代になると、たくさん日本人が本州から北海道に移り住み、おおがかりな開拓がおこなわれ、農業を始めるようになりました。開拓がすすむにつれ、北海道の原野は焼きはらわれ、森林は切りたおされ、田畑や牧草地になりました。こうして、先住民であるアイヌ人の土地はしだいにせばめられていきました。本州から移り住んできた開拓者たちは、アイヌ人を安い賃金で働かせたり、遠くへでかせぎにいかせて開拓の仕事をさせたりしました。

明治政府の日本人化政策

一八九九年（明治三二）、明治政府は「北海道保護法」を制定しました。この法律は、アイヌ人を「北海道旧土人」という差別のある言葉で呼び、アイヌ人が昔から住んでいる土地を制限し、昔からの職業を制限しました。アイヌ人の子どもたちは「旧土人学校」とよばれる学校に集められ、日本語を強制的に教えられ、日本人としての生活の仕方身につける教育をうけました。アイヌ語の学習や、昔からのアイヌ人

の習慣や風習の生活は禁止されました。

明治政府は、アイヌ人が主食とした川でサケをとること、狩りでシカをとることを禁止しました。田や畑で農業の仕事をするのをむりやりにやらせました。昔からのアイヌ人の生活習慣や習俗を日本人風に改めさせました。男子の耳輪、女子のいれずみも禁止しました。

こうして日本人によってアイヌ人は昔からの伝統的な生活習慣や習俗や文化をすてさせられ、やむなく、日本人と同じ生活をしなければなりませんでした。

アイヌ人への差別

現在、北海道には、およそ二万人のアイヌ人が住んでいます。ひっそりとまじり生活をしている人がたいへん多く、就職や結婚で差別を受けている人も多くいます。アイヌの子どもたちは、日本人の子どもたちに、「アイヌ人は毛深い、まゆ毛が太い、きたない、あっちへ行け。」と、いじめられたりもします。

だから、自分がアイヌ人であることをかくして生活しているアイヌ人もたくさんいます。差別を受けないようにするために自分の出生をかくすなんて悲しいことです。

このようにネイティブ・アメリカンがヨーロッパ人にしい

たげられ、苦しめられたと同じように、アイヌ人も日本人に
しいたげられ、苦しめられてきた歴史があります。アイヌ人
たちは、今、日本人に、この痛みと苦しみを分かかってほしい
と訴えています。日本人がアイヌ人の権利をうばったことを
知ってほしい、そのことを認めてほしいと訴えています。ア
イヌ人として誇れる生活を堂々とやっていける日がくるこ
とを願っています。先住民としての権利の回復と、アイヌの
伝統文化の再生、社会的・経済的地位の確立と民族の自立を
強く願っています。

世界中には、いろいろな民族がいます。それぞれが、さま
ざまな民族的伝統をもち、さまざまな暮らし方をしています。
ちがいがあことは当然であり、ちがっていることのすばら
しさに気づくことが大切なのです。おたがいにちがいを認め
合って、なかよく生活し、平和な生活をしていけるようにし
たいものです。